



TITLE:

經濟循環期論(三)

AUTHOR(S):

財部, 靜治

CITATION:

財部, 靜治. 經濟循環期論(三). 經濟論叢 1919, 8(4): 505-515

ISSUE DATE:

1919-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/127512>

RIGHT:

經濟循環期論 (三)

財 部 靜 治

十二

經濟循環の一相たる恐慌に付、一般學理を編むは難きや前述の如し、されど又之を主要の一事由に歸せんとするの輓近學說も尠からず、前出みつちえるは輓近諸學者か、恐慌の事由と言はんよりは、寧ろ經濟活躍の循環的動搖の事由に付、試みたる所說を抄録紹介し、その多くはかゝる動搖を促すへき主要事由として、彼等により思惟せらるゝ諸因子の作用か、投機のために助勢せられ敏活となさるへきことを、示せるの事實を特に顯彰しつゝ、諸說の相違を明かならしむへき要點を指摘論證せんとして、その循環期論中數頁を費やしたり、學說を學說そのものとして、その發達の跡を尋ね又之を比較研究するの主意よりせば、之を紹介するは有益なりと雖も、以下引續きて説くか如き研究態度上、必ずしもその必要を告げざるを以て、その要點及略說のみを摘記し、後日に於ける考證思索の便に供しおくこととせんか、(一) W. H. Beveridge, Unemployment, 3. ed. '12 は恐慌循環來を産業競争に歸し、商品の需用増進は生産者を促して、市場の大部分壟斷のために競争せしめ、一時市場の貨物供給過多を生ずるは、避け難き勢なり、そは亂暴なる投機の結果に非ず、又總需用に關する見込外れの結果にも非ずと觀し。(二) R. E. May, Das Grundgesetz der Wirtschaftskrisen, '02 は、市場に於ける工業品の供給過多による直接結果として、恐

慌來るとするは、前者と異らざるも、その供給過多の原因解析上自らその説を異にし、之を工業生産力の増進と賃銀増加との不釣合に歸し、前者の絶えざる増進は、之に相應せる販路増大の必要を告げしむ、されど諸生産者をしてその製品を急に賣捌くの望あらしむる爲には、代價引下げらるゝと共に、賃銀は貨物の供給増加と釣合を保ちて、引上げらるゝの要あるべきも、物價騰貴の勢を伴へる繁榮期中、必然かゝる産業安泰の條件は破られ、市場供給過多に終るは避け難しとし。次に(3) Hobson, *The Industrial System*, '09 は、循環的供給過多の原因を過大貯蓄に歸し、假りに繁榮期中消費の増進率にして、生産の増進率と歩調を同しうして、進めりとせんか、その繁榮を無限に續くるの望なしとすへき、固有理由は全くなからん、されど輓近社會の實況によるに生産されたる富の大部分は、少數人の一階級に歸し、産業活躍の際その所得は、その消費の増進以上に急増し、有餘の所得は據らなく貯蓄せらる、かくて一社會全體としては、金錢費消の輕微なる不足と、之に相應せる貯蓄過多と起る、その間富める階級はその新貯蓄を、生産的企業に放下し、かくて貨物の供給を増大せしむると共に、更に貯蓄の料たるべき所得を増加せしめんとす、この歷程は繁榮年次中累積的にその歩を進め、遂に市場に於ける貨物の堆積過度と成り、最早や儲けを得て賣り得ざるに至るとせり。次に(4) A. Afalton, *Essai d'une Theorie des Crises générales et périodiques*, '09 は至要原因を貨物の效用遞減に歸し、一恐慌の特色たる物價下落の起因は、一般生産過多を生じ、販賣に供せられたる貨物總量の社會的使用價值を、減せるによるものたり、涯りなき人欲は悉く充たさるゝことなしとするも、市場に於ける實貨物に對する欲望は、治ねく

充たさるゝかために、その貨物の限界效用を減せしめ、その結果一般物價の下落となり、間々生産費以下に下る、而して繁榮の後に恐慌、生産過少を承けて生産過多あるは、資本本位經濟の特色たる、迂回生産方法の特色たり、乃ち消費貨物の市況有望なるときは、新工場の建築と新機械の注文とは起るも、その工場漸次落成を告げ新機械据附けらるゝや、消費貨物を多量に生産するに至り茲に市場貨物の供給過多を見るに至るとせり、次に(5) M. Bouniatian, Studien zur Theorie und Geschichte der Wirtschaftskrisen. '08 の過大資本化説は Hobson の過大貯蓄説に似たるもの多し、惟へらく繁榮と不景氣とは、過大資本化てふ同一原因の異なる二結果たり、絶えず生産的努力を續け、之による利殖の繼續に勉むるかために、生産の膨脹を消費の増加以上に急ならしめ、かくてその間に必然不調節を生じ、膨脹期と縮少期とを循環せしむるに至る、かゝる支障の根蒂は、社會の資本本位組織内に深く宿され、之かために個人の生産活動とその消費行動とを分離せしめ、富の分配に於ける不平等を促進す、こは過大資本化の原因たり又結果たる一事情たりとしたり、而してその資本集積の過程を説ける所によるに、産業界の一部に臨機の代價騰貴起らんか騰貴せる貨物を所有せる人の掌裡に、購買力は集中せられ、その集中は資本の蓄積を増し、生産方便の大需用を促してその代價を騰貴せしめ、かくて又購買力は生産方便を所有又は生産する、人々の掌裡に集まりて資本の蓄積を増し、同じ資本増加の進程は一時累積的に進めらる、されどその過程は結局その逆轉を生むに至る、蓋し少數階級の掌裡に於ける購買力集中は、衆庶の購買力を犠牲とし、消費は絶對的には増すも、その増進は増大せる生産設備により、産出せらる

、貨物供給の増進に比して遲緩なり、然るに諸生産方便の代價は、究極に於ては、生産上それ等方便のために直接間接の援助を蒙るべき、消費貨物の代價により、左右さるべきを以て、消費か資本の蓄積並にその資本を餘儀なく放下すべき生産方便と、膨脹の歩調を同じうし得ざるの事情は、結局消費者及生産者の貨物代價を下落せしむべからざり。次に(6)一九〇二年以來シユモラーの雜誌中に、屢論文を發表せし *Stagnation* は、他の貨物生産用の貨物生産過多並に貸付資本不足の勢増進は、繁榮の結果にして、又恐慌及不景氣を惹起すべきものなりとしつゝ、その文句の確實なる意義何たるかを尋ねて説けり、その生産過多とは諸機械その他生産設備の可能購入者が資本を潤澤に得ること能はざるため、是等生産資本を購入し運轉せしめ兼ねとの事由に基づき、之を儲けある代價にて賣込み得べき以上に、多しとの意なり、その資本の不足とは、放資市場に於ける貸付基金、繁榮年次中大に借出されたるかために、空乏を告ぐるに至れりと、言ふの意に近し、されどかゝる貸付資金の形によれる資本缺乏は、自分免許の借り手か、その企業擴張手續遂行上必要を告ぐべき、資本貨物の缺乏てふ、實際難關を收蔵せり、その際金銭の供給を増せはとて、何等救済の效なかるへし、蓋し金銭は好し貸主より借り手に引渡されしども、その金銭を以て購入の資となし、閑散に歸するの虞ある産業設備運轉のため、必要を告ぐべき諸貨物に之を換へ得るに非ずんは無用なるべきを以てなり、而してかゝる必要を告ぐべき貨物は元來勞働と勞働者か消費すべき諸貨物とより成る、乃ち知る、禍根は生産上の不釣合にあり、詳言すれば、生産設備并に住宅の如き耐久消費貨物の生産過多と、その設備運轉上必要を告ぐべき

諸貨物の、同時生産過小と存すと説けり。次に(7) George H. Hull, *Industrial Depressions*, '11. は右スビートホフが諸經濟記錄の理論的解析を本とし、歸結し得たると同様なる結論を、實務經驗を基として下し、神秘的なる不景氣の原因にして、由來世人に解せられさりしは、高き建設費にありと主張したり、乃ち農業商業に反して、無限に伸縮され得べきは工業なり、特に工業中建設事業のために、盡さるゝ部分は然り、されは景氣の大煽り Booms 及不景氣の源泉は、家屋、店舗、工場、鐵道、船渠等の建設及裝置に、當るべき企業に求むるの要あるを認めし氏は惟へらく、全建設工事はあらゆる工業行爲の、四分の三以上を占むと想はるゝか、少くともその三分の二は事業界最も繁忙の歲にても、修理、改築及人口増加のため必要を告ぐべき増築よりなる、建設工事のこの部分は年々その必要を告げ、之を實行するの外なかるべきも、残りの部分は隨意建設工事 Optional Construction なり、之を起すか否かは、その新設備の増置に付、放資者により見込まるゝ儲けの、多きや少きやにより決せらるゝと、かくて産業循環の徑路を、建設工事繁開の循環により説明せんとせる Hull は、一面狼狽か純然たる金融上の亂脈により、惹起さるゝこと多きを認めつゝ、一切の産業不景氣は、高き建設費により惹起され、鐵の高價を以てその前兆とすと斷したり。次に(8) Jean Lescure, *Des Crises Générales et Périodiques de Surproduction*, '07. は、諸産業に於ける放資の干満は、産業循環の流れを惹起すべきも、この干満を促すべき重大因子は、見込の儲け歩合動搖にあり、その儲けとは賣値と生産費との間に生ずる、開きの意なりとし、惟へらく、繁榮期續く間に、その生産費は徐々に競り上げられて、終に賣り値間近に及はされ、

儲けの開きを狭小ならしめ、從ひて進みて放資するの念を阻喪せしむるに至る、その生産費増加は高價となれる原料、高率となれる利子、高き賃銀、新企業の創設舊企業の擴張に伴ふ經費増大に基づくものたり、然るに經費増進に本つく、儲け歩合への食込を埋め合せんとして、賣値を上げんとするも自ら之に限りあり、蓋し重ね重ね増され來りし市場供給額により、割合に切なる欲望は充たされても、民衆は分量猶餘れりとすへき貨物を、猶高しとすへき代價によりては、買はんとせざるへき時期來ればなり、かくて新企業につき見込の儲け、怪やしまるゝときは放資者は事業擴張の勢を支ゆるに必要な貸付を、多額になすことを躊躇し、危險少き政府公債并に之と同様に手堅き證券を選ふに至り、諸企業は自由に借金し得ざるかために、その擴張案の遂行を妨けられ、生産貨物の需用を減すへしとせり。次に(6) T. B. Veblen, *Theory of Business Enterprise*, 04 は豫想利潤と市場通用の資本還元との齟齬に重きをおきて、惟へらく、増されたる需用及騰貴せる物價は、此勢に驅られし諸業に於て、見込の企業利潤を増大せしめ、その見込利潤増大のために、諸企業の資本還元上之を多大に見積るに至り、その見積の多大は當然諸財産の擔保價格増大を意味し、信用の大膨脹從ひて又主として之により左右さるへき事業活躍へ、進むの途は開かる、右需用増進、物價騰貴、豫想利潤の増大、諸企業の膨大せる資本還元、信用膨脹の繼起は、之を促すの基礎持續する限り、詳言すれば、需用又は販賣代價に付ての豫想増加、經費の豫想増加に比して大なる限り、累積的に進行すへし、されど右の過程は結局その過程自體の基礎を、陰密の間に顛覆せしむへし、蓋し經費は勞働費の増大、并に諸企業に於て購入すへき諸貨物代價の

漸次擴大に連れて、増大すべきを以てなり、結局夫れ等の經費は見込の賣値に近つき、儲けの開きとして豫想されしものを、失はしむるに至る、かくて市場通有の増大されたる資本還元は、過大と想はれ初むるに至り、従ひて又借財の擔保は事業界の評價上、その價格を墜し、授けられし信用の擔保として、相當と想はれざるに至り、繁榮期の特色として事業の多望を信じて疑はざりし調子、今や一變して神經過敏となる、かゝる機會に重きをなせる數債權者あり、その債務者の現收益力上最早やその擔保の評價を見たる資本還元を許すに足らざることを、斷するの一事あるのみても一般恐慌を惹起すに足れり、乃ちこの事あらは清算は初まりて、一業より他業に波及し、かくて繁榮を不景氣に變せしむとせり。次に(10) W. Sombart, Die Störungen im deutschen Wirtschaftssleben, '04 は恐慌來の主因を、生産上の不釣合に歸したるも、獨逸に於て一九〇〇乃至一年中沈衰に歸せし、景氣大崩りの例を引き、電燈、電話、市街軌道、住宅、自轉車等の、ためにすべき生産設備にありても、諸機械製造工業に於けると同様、生産過多著しかりし事實を引きて生産上の不釣合、生産過多か諸工業設備に存すと、説くは不精確なるべしと考へ、釣合の實際喪失は有機的材料を使用する産業と、無機的材料を使用するものと、その膨脹の程度異なるにありと觀し、銅鐵を以てその典型とせる無機の産業は、短期間内に莫大の程度に膨脹しつつ、原料の缺乏により大障礙を受けることなきを得へきも、綿糸紡績をその典型とせる有機的産業は、之と反對に常にその歲に於ける、收穫の不定により左右せらる、かくて謂ひ得へし、有機的産業に於ける事業狀況は、收穫により決定さるゝも、無機の産業に於ける事業狀況は、原料の生産を決定すと

從ひて繁榮期に次いて起るべき轉近恐慌は、事實上に於ては有機界と無機界と、その生産の旋律を異にする結果なり、無機の産業が資本の大放資により、急激に擴張せらるゝ際、收穫により左右さるべき無機の産業は、之と歩調を同しうするを得ずとせり。次に (11) T. N. Carver, A Suggestion for a Theory of Industrial Depressions, '03 は、生産貨物の價値を律すべき、價値の法則を應用することにより、産業周期に關する一解釋を着想し、一工場製品の賣値に付、割合に輕少なる變動あるも、その工場の産額及經費不動なりとせば、その利潤には遙かに大なる變動を惹起すべきことを指摘しつゝ、運轉中の工場價格は、その見込利潤の資本還元價格なるを以て、若し利潤の大増加あり、又その大利潤を續け得べく豫想されんか、その工場價格の大増加を惹起すべく、從ひて一法則として、生産貨物の價格は消費貨物の價格に比し、一層劇しく動搖するの傾向ありと説き得へしと觀し、消費貨物の代價小騰貴により、促進されし生産貨物の大膨脹あるもその膨大せる生産貨物により作出されし消費貨物、市場に溢れてその價格を引下くるの曉に至らは、次いて生産貨物の價格を、減せしむること一層大なるへしとせり。次に (12) Irving Fisher, The Purchasing Power of Money, '11 は興味ある他の一着想を遂げ、恐慌の由來を、利率が物價標準の變動に調節さること、遲緩なるの事情に歸せんとせり、氏は物價が一理由に基づき騰貴し初むるときは、利子歩合も上れと、その勢急ならさるかために、物價騰貴により惹起されたる元本の購買力低下を償ひ得ることを統計によりて立證し、かくてかゝる時機に際し、借手は一般的には良債主を得、高き利潤を收むることゝ成るも、借手は主として活動せる事業家、乃ち恰も

達見の明に最も富める階級よりなるを以て、右の機運に乗すること債主に比して遙かに敏速なるべく、彼等はその機を見儲けんと希望すべき結果として、貸付は急激に擴大し、その擴大は主として銀行信用の貸出、詳言すれば兌換券の増加によりて行はるべく、次いで又増大せる通貨額は一層迅速となれる貨幣及小切手の流通と相俟ちて、物價を騰貴せしめ、又右の全過程は前よりもその標準を高めて新たに繰返さるゝに至る、而も亦利子歩合騰貴は、遅延ながら漸進的に起り、その結果物價騰貴を凌ぐに至るや否や、全形勢は一變し、借手は最早や大儲けを爲さんと期待する能はず、貸附金の需用膨脹は止み、高率となれる利子は、借金の擔保に供せられたる、幾多證券の代價を低下せしめ、借金を前と同率又同額により、借り換へ得べきを期したる事業家は、之を爲し得ざるに至り、その一部はかくて倒産の運命に委ねられ、銀行の支拂能力に關する疑懼は起り、現金の取附、餘儀なき貸附節限、利率の法外なる騰貴となる、略言すれば恐慌の諸現象起るとせり。最後に猶附説すべきは、(13) Ludwig Pohle, Bevölkerungsbewegung, Kapitalbildung, und Periodische Wirtschaftskrisen, '02 か恐慌學理の基本を、一面には人口の絶えざる増加、他面には放資の不定なる増加におかんとして、面白き説明を試みたることなり、乃ち氏は人口増加の勢絶えず續けられ、かくて夥しき新入隊者は規則正しく、産業軍營に投せられつゝあるも、之に適應すべき産業設備を得んとせば、諸機械、諸原料等を、舊産業兵力にて使用し得べきよりも、多量に生産するの要あるも、貯蓄の放資せらるゝは不規則なるかために、この希望は年々實現せらるゝを得ずと主張せり、されど又氏は其の後に至り、Konjunkturschwankungen und Konjunkt-

urb-richterstattung, 10 を草して、事實上 Spiethoff とその説を同しうし、恐慌の主要原因は固定資本構成と、流動資本構成の不平等に存すとし、唯經濟上、社會上に於ける恐慌の結果は、人口が不景氣の時にも、規則正しく増すの事實により、増大さるゝを附言したり。

十三

以上二節により紹介せるものゝみを、推して考ふるに、現時代の特徴たる經濟活動干満の循環ある所以を説明せんとする現代學者の所説も歸一せず、その所説は皆着想に於て見るべきものもあるも、同時に又人をして當惑せしむるものあるを見ん、一切の學説は何れも、尤らしく想はるゝに拘はらず、何れか實際を充分に穿てりとすへきや疑なき能はず、何れの學説も、その他一切の學説を、必然的に排斥することなし、何れの學説も特定現象の説明としては、間然する所なしとなし得たりとするも、それ等諸説中、一切の現象を説明し得るものあるか、將た又是等並存せる諸學説を、一形式により一團とし、かくて矛盾なき一説として、全部穩當とすへきものを、形成し得へきか。

こはミツチエルか疑へる諸問題にして、氏か是に答へし所も亦、巧みなる論理に惑はされ易き吾人を誡しむること多きに似たり、乃ち氏惟へらく、是等諸學説を立證、評論するの論理的手續により右の諸問題を解決するの望は輕微なり、是等の諸學説は 巧妙及首尾一貫上如何にその名聲を博し得へしとするも、産業循環の現象に付、鋭き一見識を與ふること以外には、その價值輕微に過ぎず、諸學説の適否驗めざるへきは、その學説により解釋せんと企圖せらるゝ、諸事實の

研究によりてのみ然りと、而も亦氏は諸事實の取扱方に付説いて曰く、諸學説につき、之を肯定又は否定せしむべき、證據材料を集むることにより、代る代るその學説を驗めずの方法に出てんか、研究の遠近法はために歪められん、蓋し興味ある點は、一學者の見解當れるや否やの問題に非ずして、諸事實の明解にあり、繁榮、恐慌及不景氣の諸現象を觀察し、解析し、順序立つるは、主要の仕事なり、吾人にして萬一諸學説に關聯して、諸現象を考察するの迂路を踏まず、直進一路右の諸事實を取り究むることゝせんか、好成績を擧ぐるの望は多からん、かく直路諸事實を捕捉するの方略によらんか、他人により遂けられたる諸結論を、無心を使用することにより、出發すること決してなし、されど又それ等諸結論は一面に於ては、捜さるべき諸特定事實、遂けらるべき特殊解析、試むべき特殊排列を、着想せしむへし、實にあらゆる方面より、助援を求むるに非ずんば、全研究は粗大又皮想的たるべきも、必要なる助援は、諸事實に付新鮮なる一吟味を、遂ぐるの一助援にありと。